

Hans Mayer:
AUSSENSEITER

森川俊夫

本書は、古典古代から現代に至るアウトサイダーのエンサイクロペディアであり、このきわめて文学的な現象——「文学は特殊なもののカテゴリーに属する」（ハンス・マイヤー）——の哲学的、社会学的考察であり、また歴史的展望でもある。

「ユードイトとデリラ」「ソドム」「シャイロック」と大きく三つの主題に分けられたこのアウトサイダー論の一つの大きな特徴は、実存的アウトサイダーの概念を持ち込んだ点である。

実存的アウトサイダーとは、たとえば神の呪いを受けたもの、ギリシア古典悲劇における宿命を担わされた存在であり、近代以降にかかわって言えば、性や素姓、肉体的・心的特異性など、個人の意志とは無関係な要因によって疎外された存在である。いわば、誕生し、存在することが、ただちに疎外と結びついている存在である。

これに対して、自身の感情、意志、思想、行動によって四圍と対立し、自身を疎外して

いく者を、マイヤーは自発的アウトサイダーと呼んでいる。もちろんこれは実存的アウトサイダーと相反するものではない。混合形態が見られるばかりでなく、実際にはこれが数的には優位を占めるかもしれない。

自発的なアウトサイダーとは、たとえばコリン・ウィルソンのアウトサイダー群像がそれである。ウィルソンは、アウトサイダーと社会との緊張関係を視野に据えながら——「アウトサイダーは、何よりもまず社会問題である」(コリン・ウィルソン)——アウトサイダーについて語り、アウトサイダーの視点から社会とその秩序について否定的に語っている。それは五十年代後半の「怒れる若者たち」の激越な自己主張である以上、当然の成り行きであり、それによってここに登場するアウトサイダー群像は、実在の人物はもちろん、虚構の人物に至るまで、強烈な実在性を具有するに至っている。

アウトサイダーは、実存的アウトサイダーも含めて、本質的、構造的に社会的に規定された存在である。しかし、自発的アウトサイダーの場合、社会との緊張関係を生み出す原因となるのは、アウトサイダー自体である。

マイヤーは、これら二種類のアウトサイダーをギリシア古典劇の例によって説明し、さらに両者の混合形態として、プロメテウス、アンティゴネー、ヘーラクレース、メーデイアなどを挙げているが、興味深いのは、オイディプスについては触れられていない点である。たしかに、王位にある者をアウトサイダー視するのは適切でないかもしれない。しかし、神の呪いを認識するやただちに自身を疎外するオイディプスは、自発的アウトサイダーと実存的アウトサイダーの性格をあわせもった存在と見ることが出来よう。

このギリシア神話の悲劇性が、エウリーピデースにおいてすでに風化しはじめ、ローマ時代にはこの傾向がさらに進行して、悲劇の

形式化、美学化が行なわれ、ギリシアの悲劇的アウトサイダーが文学的教養の対象と化したというマイヤーの指摘は興味深い。

古代キリスト教の世界では、信仰というものの性格から、アウトサイダーは異端者にほかならなかった。そしてまたこの異端者は自発的アウトサイダーの部類に属するものであった。そのキリスト教世界における唯一の例外ともいうべき実存的アウトサイダーは、イスカリオテのユダであるというのが、マイヤーの見解である。ユダは、自らの意志で裏切りに踏み切った自発的アウトサイダーではなくて、聖書の予言が実現するのに力をかそうと決意した真の使徒、宿命としての役割のままに動いた実存的アウトサイダーだということである。

近代の初期には、文化史的に大きな意義をなう多くの劇的人間像が生まれた。ファウストやドン・ファン、ハムレットやドン・キホーテなどの名がただちに浮かぶが、こうしたアウトサイダーを、エルンスト・ブロッホは「限界を越えゆく者」と呼んでいる。ファウストが悪魔と血による契約を結んだことも、ジャンヌ・ダルクが神の声に従ったことも、「限界の踏み越え」であり、自発的アウトサイダーとしての行為である。

誕生そのもの、存在そのものが「限界の踏み越え」を意味する実存的アウトサイダー、これを発見したのは、マイヤーによれば、エリザベス時代のイングランド、とくにマーローとシェイクスピアであるという。

マーロー自身が「限界を越えゆく者」であったらしいが、そのマーローが描き出した『マルタのユダヤ人』のバラバ、あるいはシェイクスピアの『ヴェニスの商人』のシャイロックは、まさしく実存的アウトサイダーである。とくにシャイロックは、文学的、演劇的にユダヤ人のイメージを定着させるのに大きく「寄与」したとさえ言えるかも知れない。

しかしエリザベス時代のイングランド、マロー、シェイクスピアのイングランドには、ほとんどユダヤ人は存在していなかった。1290年にイングランドのユダヤ人追放の命令が下され、以降イングランドにおいてはユダヤ人は観念的な存在でしかなかったという。

マイヤーのこの指摘は、実体にもとづくことのない偏見であっても、抗うべからざる疎外を招き、実存的アウトサイダーを生み出すという、からくりを浮き彫りにしている。

ユダヤ人という実存的アウトサイダーは、それが偏見の産物であるかぎりにおいてユダヤ人の実体とは本質的に無縁であるが、ユダヤ人は、偏見の産物である実存的ユダヤ人像に規定され、自らそのイメージに近づいてゆく。それどころか、マクス・フリッシュの『アンドラ』の主人公のように、自分はユダヤ人だと思い込み、自分のあらゆる性格をユダヤ人的だと考えて絶望するのである。

このような実存的アウトサイダーを生み出す偏見はたしかに克服しがたいものではある。しかしその偏見は、かならずしも不変の恒数ではなく、時代とともに変化を見せる。本書の歴史的な展望はそのことを示している。とくにマイヤーは、実存的アウトサイダーとの関係で啓蒙主義が果たした役割、あるいははたしえなかった役割に焦点をあて、封建的体制から市民社会への変化の過程で社会的偏見がむしろ強化される局面もあることに力点をおいている。本書冒頭の「市民的啓蒙主義は挫折したという主張」はそのことを言うのであろう。

たとえば Homosexualität は、封建的体制下にあってもかならずしも深刻な疎外を生み出す要因ではなかった。構造的に不平等を原則とし、特異性が不平等のヒエラルヒーのなかに解消されてしまうような封建的体制下とは違い、市民社会が到来すると異常性に対する非寛容が支配的になる。

時代とともに変化する意識構造を象徴するものとして、ヴィンケルマンの死とその影響が考えられる。

ヴィンケルマンは、若きゲーテたちの「模範であり師」であったばかりでなく、その影響は国外にまで及び、ロンドンの芸術愛好家やヴァチカンの高位聖職者たちにとっても敬愛の対象であり、いわばヨーロッパ的巨人だった。しかしヴィンケルマンは Päderastie の嗜好の持主であり、それが結局はわざわざいして、十八世紀の半ば、トリエストの旅舎でバゾリーニ的な横死をとげることになった。

ヴィンケルマンのこの二重生活は決して隠微なものではなく、むしろ公然たるものであったという。それは、世間の常識に対する挑発ではなく、封建社会の許容範囲に属するものだったのである。

それに対して、ヴィンケルマンの死後四十年近くをへてゲーテは『ヴィンケルマンとその世紀』を書いて、若き日の先達に対する深い敬意を捧げているが、この「望むことを許される至高の幸福の頂点にあって世を去った」ヴィンケルマンに対する弔詞は、偉大なヨーロッパの巨人を老耄から救った死の功績に対する讃歌である。

「貴族の啓蒙主義者たちがアンシャン・レジームのもとで市民的諸権利を代弁して、実存的アウトサイダーの尊厳と生存権がもともと確保されていた」時代にヴィンケルマンが生きていたのに対し、その死後四十年のゲーテはすでに、あらゆるアウトサイダー性を抑圧的に同化しようとする市民時代に足を踏み入れていたのである。

マイヤーは、市民階級の経済的、政治的発展とともに、むしろアウトサイダーにとって受難の時期が訪れたと見ている。市民的啓蒙主義の平等の要請が、不平等の現実に触発されて生まれてきたものであるはずなのに、実際には不平等を糊塗し隠蔽する効果を発揮し、

そのことが、かえって実存的アウトサイダーの存在を際立たせることになったというのである。

もちろん、平等の要請の背後には、人間の平等についての宗教的、哲学的認識があることも、おそらく歴史的事実であろう。それなしには平等の要請すら生まれ得なかったと言えるかもしれない。しかしそのことも、現実の不平等、多様性を否定する論拠にはなり得

ない。

マイヤーは結局、人間存在の多様性の認識を土台にすることが平等の要請に正当に応えることになるという考え方、これをこのアウトサイダーのエンサイクロペディアの通奏低音として響かせているように思われる。

Hans Mayer: *AUSSENSEITER*, 1975, Suhrkamp Verlag.